

「熊本学園大学」創設裏面史 ～知られざる人々、知られざる事柄～

岡 本 恵 也

はじめに～なぜ裏面史か～

私が在籍した熊本学園大学経済学部（当時）の論集、『熊本学園 経済論集』に「退職記念号」を出していただくことになった。私もせっかくの機会であるから何か寄稿したいと思ったが、2014年7月の退職前の4年間、学長職にあり、しかもこの間、大学創立70周年を迎えたこともあり、やはりこの機会に学長を勤めたことで知りえたこと、関心をもったこと、できれば多くの関係者ですら忘れてしまっている、あるいはまったく知らなかったというような大学の歴史について書き残すことにしたいと思うようになった。

慶応大学の創始者が福沢諭吉であり、早稲田大学の創始者が大隈重信であること、さらに、同志社大学の創始者が新島襄であることはあまねく全国的にも知られていると言ってよいだろう。私が知る限り、その他の多くの私立大学も歴史のある大学の創始者はみなその時代に活躍し、その時代を代表する人である。しかし、上記三大学は創始者の知名度による例外で、それ以外の大学では、その大学の歴史の黎明期については関係者ですらほとんど知ることがなくなっていると言っても過言ではないだろう。

わが熊本学園大学の創始者も、と言うより、創始者たち、あるいは創設を支援した人たちもその時代を代表する、少なくとも熊本の地にあっては同時代に知らない人はいないという著名な人物であった。しかし、大学の創設以来、70有余年は長く、その名前、その人柄、その事績を知る人はほとんどいなくなっている。単に時間の経過が創始者を忘れさせたというだけでなく、戦前の大学が国家有為の人材を輩出することを大学の使命としたことに対して、戦後は一転、個人の成長を涵養することを大学教育の目的とするというように、時代精神が大きく転回したこと、それとともに、戦前の時代精神を色濃く帯びた創始者達はほとんど忘れられた、省みられるこのない人となったのであろう。

しかし、大学創設の時代がどういう時代であったのか、どういう時代精神の中で創設者達は大学創設に情熱を燃やし、使命感をもったのか、どういう人たちが大学創設に協力したのかということは戦後70有余年を経た今だからこそ省みる意義のあることだと思う。また、いかに

大学創設の理念が立派でもそれを実現する資金がなければ理念はまったく絵に描いた餅に過ぎない。理念を描くことだけなら必ずしも難しいことではないが、資金を集めるという現実には難行苦行である。どのような難行苦行があって資金調達は可能となったのか。

「東洋語学専門学校」は昭和 17（1942）年に創設された。初代理事長は石坂繁、初代校長は阿部野利恭、戦後、熊本短期大学、熊本商科大学に昇格してからの初代学長は高橋守雄であった。「東洋語学専門学校」から現在の「熊本学園大学」までの変遷は、『熊本短期大学・商科大学 40 年史』、熊本学園七十周年記念出版『近代熊本の巨人』に詳しい。立派な「大学正史」がすでにある。前者は当時の大学役職者の分担執筆によるもので、客観的事実の記録に重点をおいたという編集方針が明示されている。後者は、40 年史を踏まえて、さらにその後の資料、関係者の遺族からの聞き取りを加えて、熊本商大・日銀 OB の徳永洋氏個人の執筆によるものである。「正史」はやや無味乾燥になりがちであるが、『近代熊本の巨人』は徳永氏個人の執筆によるため分かりやすく、生き生きとした叙述がなされていて大変読みやすくなっている。

したがって、熊本学園大学の「正史」に公になっていること以外に公なことで何か書き加えることはない。とは言え、熊本学園大学の歴史について関心をもって色々調べているうちに思いがけず、公になっていない大学の創設にかかわる歴史的事実、言わば、大学創設の裏面史とでもいうべきことがらについて是非書き残したいと思うことに出会った。裏面史というのは、何かあやしげで、重要ならざる些事ではないかと思われがちだけど、なかなかどうして実に興味深いことがらがある。特に資金集めの難行苦行は創設関係者のドラマである。この論稿のメインタイトルを「熊本学園大学」創設裏面史とし、サブタイトルを「知られざる人々、知られざる事柄」とした所以である。「真理は細部に宿る」という有名な言葉があるが、「真実は裏面史にある」という言葉も大学の歴史について広く調べている内に、あながち誇張ではないと思えた。

柳田國男の『海南小記』によせて、宮本常一は次のように言っている。「歴史は書かれた文字の中にのみあるのではなく、あらゆる人文的現象の中に存在するものであり、どのような些細なことにも歴史は秘められているもので、そういうものに目をとめ、またその中に含まれている歴史を明らかにしてゆく重要性を指摘し、それはたんに個人の力によるのではなく、多くの人の協力によって成功するものであることを示唆している。」（佐野眞一編『宮本常一』95 頁）宮本常一による柳田の方法は示唆に富む。正史にない熊本学園大学創設「裏面史」にも「あらゆる人文的現象」があり、興味深い熊本学園大学の創設の知られざる歴史がここに秘められているからである。

裏面史の主役～保田與重郎と紫垣隆～

裏面史の主役は「知られざる人」紫垣隆である。当時でも、公職にない紫垣は一般には「知られざる人」であったかも知れない。現在ではなおいっそう「知られざる人」である。しかし、当時の有力者の間では、紫垣はまさに「知る人ぞ知る」大人物、大傑物であった。時に恐れられ、時に頼りにされた。これぞという時の調停者、フィクサーであった。

私も少なくとも1年前までは紫垣なる人物をまったく知らなかった。しかし、この人物なくしては熊本学園大学の創設はありえなかったであろう。紫垣がいかなる人物であり、いかに大学の創設にかかわったか、彼と彼を取りまく群像が本稿の主題であるが、私がこの人物をしることになった機縁は保田與重郎である。

そこでまず、なぜ保田與重郎を機縁として紫垣隆を知るにいたったのかという経緯についてふれておきたい。この経緯については、松田敬吾氏（「ヤナセ元役員」）に感謝しなければならない。松田氏の知遇をえることがなければ紫垣隆に出会うことはなかったし、興味深い熊本学園大学の裏面史を知ることでもなかったであろう。松田氏は熊本学園大学の関係者でもなければ、ましてや紫垣が熊本学園大学の創設と関係があることもまったくご存知でもなかった。ただ、氏は日本の文芸潮流に名を残す「日本浪漫派」の代表、保田與重郎の近い縁戚であった。そして、保田が戦後も、何度か、熊本市九品寺（くほんじ）にあった「紫垣隆邸」を訪ねた、ということ松田氏からお聞きした。また、その際には、熊本を代表する文化人、荒木精之ともども訪問されたとも。

私の専門は経済学であり、文学、思想は門外漢ではあるが、教養・趣味としては文学、思想にも長年、興味と関心を持ち続けてきた。かの保田與重郎が遠路、来熊してまで訪ねた紫垣隆とは何者かと俄然興味をもった。それからまもなく、熊本市上通町の老舗古書店「舒文堂河島書店」で、河島一夫社長に紫垣隆なる人物を知っているかと問うたところ、古書店の天井に届きそうな高い本棚の最上段に梯子をかけて、紫垣隆『大凡荘 夜話』を取り出して見せてくれた。大分古びて見えたが、それでも、見るだに重厚な体裁の豪華本であった。さぞ高価だと購入は尻ごんでいたら、今頃は買い手がないので三千五百円だと聞いたのですぐに購入した。帰宅後、この本をパラパラとめくると、一目で目次に「東洋語学専門学校」、さらには、その前身、海外協会の「支邦語学校」の文字が目についた。六百頁に及ぶ浩瀚な書物のその箇所だけを取りあえずすぐに読み始めると、設立資金調達をめぐる紫垣を中心とする「あらゆる人文的現象」、錚々たる群像に関する彼の独白である。興味つきない「知られざる人々」、「知られざる事柄」であった。この書物は彼の蒐集になる多くの日本を代表する大家の書画、中国、朝

鮮の陶磁器、骨董の名品の数々の写真が掲載されている「定価 壱万円」の豪家限定版である。昭和 38 年の出版であるが、現在の価格で言えば数万円ということにはなるだろう。また、この著書に紫垣を評して寄稿している人物は武者小路実篤、尾崎士郎、安岡正篤、岸信介をはじめとする錚々たる人物である。裏面史を飾るにふさわしい紫垣の交流の広さ、大きさをしのばせる。

ここで、保田與重郎と紫垣隆の交流の濃密さを理解するために夫々の住居について言及しておきたい。上述した熊本市の九品寺にあった紫垣の住居はそれを知る数少ない熊本の高齢者に聞くとまさに「大凡荘邸」とよぶにふさわしい伝統的日本家屋の豪邸であった由である。昭和 27 年に築造されたものであるが、彼の死後、取り壊され今はマンションが建っているので残念ながら実物を見ることはできないが、この『大凡荘 夜話』の中にその邸宅のたたずまい、風格をしのばせる写真がある。

一葉の写真には「大凡荘中門を背に立てる著者」とあり、アジア主義者として著名な末永節の「大凡荘」という自書自刻の扁額が門上にある粹をこらした中門の前に紫垣が立つ。中門とあるから表門、裏門もあったと推察され屋敷の広さがしのばれる。

いま一葉の写真には「六地藏の塔と著者」と記されている。立派な庭園の巨大な六地藏の塔のよこに紫垣が立っている。六地藏の塔は紫垣の 2 倍以上あり逆に庭の大きさがしのばれる。この六地藏は肥後細川家初代、細川三斎忠興公（1563～1646）が京都より取り寄せた遺愛品で、ガラシャ夫人も祀られている熊本市内立田山「泰勝寺」に据えられていたものである。大塚勇太郎なる紫垣の友人を介して紫垣邸の庭に移されたようだがいかなる経緯で紫垣邸に移ったかは詳らかではない。ちなみに、紫垣の容貌は誰か著名人が「志賀直哉」に似ると書いていたが、志賀直哉を「国士」風に凄みをきかせたら似てないこともないとも思える。

他方、保田與重郎の京都嵯峨野の鳴滝にある居宅「身余堂」については写真界の第一人者である水野克比古『保田與重郎のくらし—京都・身余堂の四季』（新学社、平成 19 年）がありその全貌をほぼ知ることができる。この写真集の中に、保田が仮空の茶会の案内のために自ら「身余堂」について紹介する一文がある（仮名遣い、旧漢字はそのママ）。やや長文の引用になるが「身余堂」と紫垣隆の関連も見ることができる。

山荘は、文徳天皇御陵の参道上の臺地にある。もとは松の間に雑木が生い茂り、「如何なるけものか住みつらん」風情の山地だったが、雑木を一掃し、山道を拓くと東南に京都市街の大半が眺められ、南眼下は太秦の田園地がひらけ、はるかに岩清水、生駒が見える。西は愛宕山、小倉山に對し、その間の御陵を廻る二つの池は、山荘の庭である。・・・

わが山荘は、身余堂とよび、書屋を終夜亭と號す。新古今集と芭蕉選句によったもので、身余は、新古今の熊野の神託歌の「思うこと身に餘るまで鳴瀧の」をとった。こゝは太秦といへ、鳴瀧の尾である。山荘の設計は上田恆次。かくれもない河井寛次郎翁の高弟・・・建物には日本建築の基本構造を尊重し、初期の書院建築の構想に即る。それは堅實な古い農家造りに近いといふことで、この設計から家具調度の方まで、上田氏の創案によった・・・終夜亭の扁額は肥後の紫垣隆翁の題字。當代随一の老國士、そして小生とのつき合いは辱知廿五年、風流人、文人の前修である。この翁こそ元龜天正の英雄に對しうる唯一の現代人であった。

中谷孝雄のこの写真集に寄せる次の一文がさらに「身余堂」に御墨付きを与えるだろう。

私はその後、保田邸から眺めた落日の美しさが長く忘れられず、もし私が新京都市八景というものを書くとしたら、この一番にそれを書くことにするだろうと思った。

佐藤春夫先生が初めて保田邸を訪問されたのは、私より一年ほど後のことであつたと記憶するが、先生も保田邸からの眺望に大そう感心して、あんな家に住んでゐるだけで保田は詩人だといってよく、東の詩仙堂に対して西の身余堂といってよいだろうね、と私に話されたことだった。

それからまた、六、七年たち、私は伊豆の湯ヶ島に建てることになつてゐる梶井基次郎の文学碑の副碑の文字を書いてもらふ為に鎌倉の川端康成氏を訪問した。すると談話の間保田邸のことに及び、川端氏も身余堂からの眺望を大いに感心して話された。私が佐藤先生のことを話すと川端氏は即座に、詩仙堂などより保田邸の方がずっとすぐれてゐますよと談じられた。

保田が語るように、この写真集の中にある「書院」の扁額に「終夜亭」という書を見ることができる。この書は紫垣隆によるものである。紫垣はよほどの能筆だったようである。保田に書を頼まれたのであろう。「終夜亭」という命名は芭蕉の「名月や 池をめぐりて 夜もすがら」に由来する。保田は夜行型で夜もすがら仕事をしていたようである。なお、佐藤春夫は保田が最も親炙していた文人であつたそうだが、佐藤は長時間、書院に寝転んでこの扁額を愛でていたそうである。この「身余堂」にまつわることは、保田の晩年の愛弟子、谷崎昭男氏（国文学者、相模女子大学学長・理事長、谷崎潤一郎の甥）のこの写真集への寄稿によってより詳細に知ることができる。私は先に述べた松田敬吾氏の紹介で谷崎昭男氏に直接お目にかかり興味深い話を聞き、氏の案内で近く一般非公開の「身余堂」を見せていただく榮に浴することに

なっている。

保田は戦後も何回か熊本の「紫垣邸」を訪ねている。「紫垣邸」にも「身余堂」というおそらく「書院」か「茶室」と思われる家屋の門前に縦書きの大振りの看板が『大凡荘 夜話』中の写真にある。「紫垣邸」は昭和 27 年に保田の「身余堂」に先がけて建てられている。設計は熊本市の野中工務所の野中實によるものである。このような特別の屋敷の設計は施主と建築家の間でかなり相談、協議があったものと想像できる。保田の「身余堂」は影響をうけたのであろうか、保田が「紫垣邸」に影響を与えたのであろうか。

以上、ややくどくどしく紫垣隆、保田與重郎の住居について調べたことを述べたのは、紫垣隆なる人物が東洋語学専門学校の「裏面史」を飾る人物とは言え、端倪すべからざる人物であったことを言わねがためである。「風流人、文人の前修」とまで言われる人物がなぜ資金集めと言ったような最も俗的なことに関わったのか。彼の他の一面、アジア主義者、国士という側面、というよりも前面を知らなければならない。

アジア主義者 ～紫垣隆と阿倍野利恭～

紫垣隆は明治 18 年現在の熊本市春日町、当時飽託郡春日町に生誕し、昭和 41 年 83 歳で亡くなっている。父貢の紫垣家も、母しづるの実家、友枝家も大資産家であった。彼は保田ほどの人物に「風流人、文人の前修」とまで言われながら、宇土鶴城館（済々黌の分校）、熊本工業高校、熊本農業高校などを相次いで落第し学歴というほどのものはない（卒業するのに必要な単位を意図的に取らなかったのではないかと想像する）。にもかかわらず、彼は若くして伊藤博文に親炙し、朝鮮半島、台湾、満州、中国をアジア主義者として馳せ巡り、孫文、宮崎滔天兄弟、頭山満等とも深い交流があった。特に伊藤博文の朝鮮統治時代、複数の相対立する朝鮮人政治グループ間の、また彼らと日本政府との調整に知力、腕力を振るったようである。政治家でもなく、官僚でもなく、いわんや軍人でもない、いっさいの公的役職をもたない「国士」とよばれるような人物がなぜ戦前には、活躍、時に暗躍しえたのかということは今では理解しがたいことである。しかし、時々刻々変化する、言わば、「戦争の時代」の複雑な国際関係の渦中では「公人」であっては困る、肩書きなしの人物の方が後々国家間で問題をひき起こさないという政治的理由もあったのであろう。明治の大物政治家は周囲にこのような人物をすすんで近づけていたのである。とは言え、ほとぼしる情熱、使命感、政治的洞察力、政治的勘、胆力に優れたよほどの人間でなければこのような役割ははたしえない。「敢えて自慢自負するのではないが、日韓併合、支那革命に幾度か死線を越えた体験経験が、私の負けじ魂を涵養せし

めてくれたのである。」(435 頁)と紫垣が敢えて自慢自負する通りであろう。

紫垣はいかにして有力なアジア主義者になりえたのか。戦前は、子どもの数が多かったので、当然ながら、従兄弟・従姉妹の数も多い。紫垣の家はもちろん、親族も資産家、土地の名望家であったから、彼の従兄弟・従姉妹にも、そして彼等の友人、友人のそのまた友人にも傑出した人物、個性的な人物が多く、紫垣にはたとえ本人は落第してても実に多くの人脈があった。高学歴エリートから博徒まで、保守的アジア主義者から処刑された大逆事件の連座者まで、彼には学歴を必要としないぐらいの器量、度量と有力な地方門閥が背景にあったのである。この背景なしには彼が東洋語学専門学校、それに先立って海外協会「支邦語学校」のために阿倍野利恭の要請に応じて財界の雄に巨額の設立準備金の斡旋、強談判を行い、それを成功させたかは理解できない。

加えて、次の関係も重要である。彼の母方の祖父、友枝義高の弟、友枝庄蔵は細川藩の著名な漢学者、木下韡村(いそん)の塾の俊英と言われた門弟であった。(韡村塾からは綺羅星のごとき明治期の政治家、官僚、学者が出ている。)東洋語学専門学校設立準備委員長、設立後は名誉理事長、安達謙蔵(民政党幹事、内務大臣、通信大臣経験者)は友枝庄蔵の愛弟子であった。したがって、紫垣隆と安達謙蔵とはきわめて近い関係にあったのである。安達謙蔵は自由民権時代の「国権党」の雄、佐々友房の後継者で民政党を率いた戦前の政界の指導的人物であった。

彼が軍部の独走を抑えるべく、満州事変後、政友会と民政党の大連合を画策したことは昭和史の研究者の間で近年再評価されている。阿倍野は設立準備金の調達に際して、安達と紫垣に協力を願っているが、紫垣と安達との間にも当然、有無相通じるところがあったものと推察できる。この時期には、安達が画策した大連立が頓挫し、安達はすでに政治の第一線からは身を退いてはいたが隠然たる力をもっていたことは間違いない。

『喜寿 紫垣隆翁』が昭和 36 年 5 月に発刊されている。題字・装画は武者小路実篤である。寄稿者は次のような著名な人物と近親者である。岸信介 石井光次郎、緒方竹虎、武者小路実篤、堅山南風、尾崎士郎、安岡正篤、中村汀女、保田與重郎、棟方志功、坂口主税(熊本市長)、鰐淵健之(熊大、熊本商大学長・理事長)、後藤是山(九州日日新聞社主筆)、荒木精之、上塚司(「ブラジル開拓の父」、衆議院議員、上塚真熊・周平兄弟、紫垣隆の従兄弟)など等。

荒木精之(1907～1981)は熊本の地で文化活動を行い全国的にその名を知られた人物である。三島由紀夫など熊本で取材調査に訪れた多くの著名文化人は彼を訪ねて熊本近代史について教えを請うている。荒木精之に代表してもらって紫垣隆の人物像を語ってもらおう。

「私は翁と交わってすでに二十年である。それはまったく林市蔵氏の紹介であった。・・・翁も林氏と同様に熊本で私になしつつあった啓蒙的な、文化的な仕事に深い興味と理解を示され、じらいこんにちに至るまで、私は翁に親炙し、翁の眷顧をうけている。」「彼はこんにちにおいては無類の一人である。一たび筆をにぎれば立ちどころに文を成して文筆家を瞠目させる。風雲急を告ぐれば老軀をひっさげて駆馳し、一国の宰相をも叱咤激励する。事なければ悠々として故山にあって閑雲池魚の朋となっている。まさに端倪すべからざる人とはこのような人をさすのではなからうか。」「世に政治を語りまた文明を論じる人はかならずしも少なくはないであろう。また先人を愛し、書画名陶の類を鑑賞する人も少なくはないであろう。しかし、一身にしていづれもふかく、真に至れる人といふものはほとんど稀である。剣魂琴心といふ言葉があるが、翁はまさに大胆にして細心、豪宕にして繊細、丈夫の壮心と詩人の優雅の、その二面をおのずからかねそなへてゐる稀有の人のやうである。」(99～102頁)

保田與重郎に劣らず彼の人柄を絶賛している。ここに言う、一国の宰相は岸信介であり、林市蔵は熊本市出身の官僚で大阪府知事、大阪証券取引所理事長、熊本電気（後の九州電力）の要職などを勤めた実力者であり、戦前、戦後を通じて長く外務大臣を務めた重光葵は彼の女婿であった。大阪府知事時代に民生委員制度を創設し「民生委員制度の父」とも言われ、大阪御堂筋と「土佐堀川」が交錯する橋の袂近くに「淀屋の碑」と屋敷跡の石柱と相並んで彼の大きな銅像もある。熊本城行幸坂下に、一際大きな加藤清正の坐像の側に、目立たない彼の銅像と「民生委員制度の父」としての事蹟を刻んだ石碑がある。彼は熊本よりも大阪で活躍し関西で財界人として知られた人物だったのである。『林市蔵 民生委員の父』という平瀬努氏（医師）の労作がある。そこで、次に阿部野利恭についても「正史」に詳しい人物像が紹介されているが、紫垣隆との設立準備資金調達に関して必要と思われることを「正史」も参考に再録しておきたい。

阿部野利恭は明治3年「現在は熊本市の中心である水道町（当時、法然寺町）に生まれ、昭和27年に亡くなった。紫垣よりは15歳も年長である。「通った塾も定かではないが、城下の三歳年上の石光真清と極めて親しかったことから類推すると、阿部野も平川塾に学んだのではないか」と、徳永洋氏は推測する。阿部野は、明治20年に「済々黌」に入学し、同22年に中途退学し上京、明治22年設立の「和仏法律学校」（現法政大学）に学んだ。卒業後の彼はロシア・極東、満州の地で茶葉販売調査を通じて情報収集活動を行った。なぜ、彼が茶業と関係したかと言えば、現在の熊本県合志市に可徳乾三なる人物がいた。彼はもっぱら紅茶を磚茶（だんちゃ）としてシベリアで販売したいと考え販路調査を試みていた。酷寒の地、シベリアでは固めた茶を少しずつほぐして煎じたり湯に溶かしたりして飲むのが一般的であったからであ

る。可徳の活動はその後、政府の支援をうける。ウラジオストックに茶業組合中央会の出張所が設置され、可徳は所長に任ぜられた。阿倍野は可徳の手代兼通訳で出張所に勤務、ロシア滞在は2カ年半ぐらいに及んだようである。この間、後に述べる、石光真清などとかなり危険な情報活動を行っている。明治38年、阿倍野は熊本で結婚。佐々友房の指示で大連、旅順で漁業ビジネスに手を染めたりもしている。事業が目的というより、日露戦争後の租借地、大連、旅順の情報収集が主目的でなかったかと思われる。その後、磚茶の会社を市内の上熊本に設置して実業活動も行っているがあまり成功はしなかったようである。しかし、県茶業組合会長を務めている。結婚後は熊本をベースに活動していたようであり、後には熊本市議員もつとめたが、もっぱら海外協会という組織で中国、満州、朝鮮にかかわる活動を続けた。彼の「露探」中の写真は残っているが、極寒の地なので大きな厚手の外套をきているので、実像がよくわからないが、この地での活動をするぐらいだから精悍、頑健であったに違いない。後の「東洋語学専門学校」当時の着物姿の写真を見ると何か茫洋とした、いかにも国土然とした容貌である。

荒木精之は『熊本県人物誌』で次のように言う。「(佐々)友房は国家的見地から有為の青年たちを各国に結びつけた。その代表的なものをあぐれば、中国における宗方小太郎、朝鮮における安達謙蔵、そしてロシアに行った上田仙太郎などである。」(206頁)ロシア通という点では上田仙太郎(1868～1940)は傑出していた。井上智重『言葉のゆりかご』によれば、「ロシア通の第一人者として知られた上田仙太郎は風変わりな外交官だった。・・・日露戦争の戦中戦後を通じ、レーニン一派とひそかに通じ、後方かく乱工作に当たった。ロシア革命を予言したのも上田であった。」(64頁)阿倍野はハルピンで情報活動中ロシアの官憲に拘引され危ういところであった。同行していた上田の堪能なロシア語で命拾いしたようである。阿倍野も佐々の指示でロシア・シベリアを主たる活動地域としたのであろう。阿倍野は茶業に特別の関心があったわけではないと思うが、ロシア・シベリア調査に可徳の茶業は渡りに船であったろう。かの地で出会い行動をともにする幼なじみの石光真清についてもふれておきたい。

石光真清(1868～1942)はロシア・満州で情報を収集するスパイ、当時の言葉で言えば、「露探」、現代では「インテリジェンス・オフィサー」と呼ばれる者であった。ただし、彼は阿倍野とはちがってれっきとした陸軍幼年学校出身のエリート軍人であった。ただし、ロシア・シベリア探偵中は軍籍を離れていた。彼の死後、彼のシベリア・満州での「露探」としての手記をジャーナリストであった彼の長男、当時毎日新聞記者であった、石光真人(1904～1975)が『城下の人』他、四部作として編集、公刊し、昭和34年、毎日出版文化賞を受賞した。熊本短期大学に在職することになる、当時、朝日新聞の森本忠が公刊を薦めたようであ

る。日露戦争前の混沌とした、ロシア極東、満州、中国内モンゴル地域の情景、情勢を克明に綴り、馬賊や馬賊と行動をともししていた日本人女性など現地のあらゆる人間との交流が魅力的に描かれて高い評判をえた。加えて、NHK 衛星放送でドキュメンタリードラマ「石光真清の生涯」が平成10年4月4日～7日、四夜連続で上映された。仲村トオル・真清、妻・中山忍、母・岸恵子の配役であったこともあり、全国的に知られることになった。このドラマについて郷土史家、末吉駿一氏は次のように述べている。「この放送に合わせて、生地熊本市で真清展も催され、私も出向きました。静かな、しかし深い感動を与える自伝です。たびたび登場するお花やお君は、「シベリアお菊」や「満州お菊」を彷彿とさせます。あるいは本人かも知れません。この自伝を編んだ長男真人には、『ある明治人の記録』（中央公論新書）という編著もあります。石光真清という人物は、明治という時代が生んだ一つの結晶と言っているでしょう。」（「くまとの旅」NO.96 1998）熊本駅近くの白川にかかる「泰平橋」の近く、熊本駅から道を知って行けば20分足らずの現在の地名、本山町に石光真清の生家がある。元首相、橋本龍太郎の縁戚でもあることが資料で分かる。書店「金龍堂まるぶん」顧問の樋口欣一氏を中心とする真清生家の保存活動が2015年度の「熊本近代文化功労賞」に顕彰された。

石光真清を想うと「アラビアのロレンス」を連想する。石光は「露探」としてシベリア・満州で活動中は軍籍を離れていた。彼の自由意志によるものか、職務上の配慮が分からないが、彼は任地の満州の馬賊等にも強い親近感をもっていたようだ。「アラビアのロレンス」こと、トーマス・エドワード・ロレンスもその評価は様々であるが、イギリスの情報機関の人間でありながらアラブに深くかかわっている。石光は日露戦争後には東京世田谷の三等郵便局長を務めたりしたが、シベリア・満州での華々しい活動に比べると地味な晩年を送ったように見える。彼と一時期かの地で行動をともしした佐賀県出身者の武藤信義（1868～1933）は後に陸軍大将にまで上り詰めている。安倍野利恭も帰国後は、郷里熊本では名士として遇され、東洋語学専門学校の創設に力を尽くした。ロレンスも46歳の若さでオートバイ事故によって人生を終えた。石光、ロレンスは国家の秘密任務を負い、任務を果たせば果たすほど国家の意思とは情的に離反していったように思える。人間的魅力に富む二人は帝国主義とナショナリズムの狭間で等しく苦悩を深めていったのだろう。わが安倍野も紫垣も「明治という時代が生んだ一つの結晶」、やや荒削りな結晶だったと言えるのではないだろうか。

紫垣隆と設立資金をめぐる群像

東洋語学専門学校の設立提案者は石坂繁となっている。安倍野利恭は当初、消極的であった

とも言われている。しかし、熱心な推進者は阿倍野だったと思う。阿倍野が消極的であったとすれば唯一資金の手当てが懸念であったからだろう。当時、阿倍野は海外協会の理事長であった。海外協会というのは佐々友房を中心とする国権主義の「紫溟会」を継承するもので、理事には安達謙蔵（1864～1948）、深水清（1869～1942）、平山岩彦（1867～1942）といった熊本の有力政治家が名前をつらねていた。安達をはじめ後に政府の枢要な地位をしめた人々は国権主義とは言え福祉政策にも熱心であった。欧米の社会政策を十分学んでいたのである。他方、彼らが幼年期から学んで体に染み付いていた皇国意識、儒教精神が人格の重要な骨格をなしていたことも事実である。

海外協会は移民の斡旋や中国、モンゴル、朝鮮に語学留学生を派遣していた。阿倍野は東洋語学専門学校に先立って、まず海外協会に「支邦語学校」を設立しようとした。東洋語学専門学校を熊本商科大学（現在の熊本学園大学）の前身とみるのが学校関係者の一般的見方であるが、熊本商科大学の直接の前身である「熊本短期大学」の高齢の卒業生の中には「支邦語学校」が前身だと言われる人もいる。東洋語学専門学校を苗木だとすれば、支邦語学校は「種」であったことは間違いない。この「種蒔く人」達が以下のようにいたのである。

阿倍野は紫垣に支邦語学校の設立資金の調達について相談に向かう。以下、『大凡荘 夜話』をもとに紫垣の自慢話を聞こう。

その頃熊本海外協合理事長であった阿倍野利恭が、協会（熊本市千反畑一筆者）の裏側にあった僅かばかりの空地を利用して、支邦語学校を建設したい希望を述べ、私に資金について相談をもちかけた。席上協会の理事であった緒方南溟、宇野正行（今の熊日の前身九州日日新聞社長）ともども懇願した。

彼等は何れも熊本県の有力者ではあったが、囊中は淋しい連中である。私は彼等三人の誰よりも若輩で、社会的にも交遊少なく且つ学校のことなど思いもよらなかったが、また私に特殊な先輩、知己があることを知悉してゐたらしく話の節々でそれとなく察せられた。判りやすく云えば巧みに煽動したのである。私は彼等に乗せられたことは充分承知しながらも甘んじて煽動に乗り、古庄健次郎に当たって見た。百坪前後の建物で必要の額は五千円也である。その頃の五千円は相当の値打ちがあった。私の相談には古庄は一も二もなく承諾した。支邦語学校は間もなく完成した。（436 頁）

古庄健次郎は熊本を事業の出発地にしながら、繊維を中心に様々な事業を関西、東京、フリン、中国に広げ、「一大コンチェルン」を目指した、スケールの大きい、熊本を代表する実

業家であった。古庄健次郎の一大事業、その盛衰については、地域に密着した経済誌「くまもと経済」を刊行する、地域情報センター社長の松岡泰輔氏に『古庄財閥』（昭和54年）という力作がある。

阿倍野は古庄とも親交があったのである。にもかかわらず、敢えて紫垣に頭を下げて懇願しなければならなかったのかはやや不思議の感もなくはないが、親しく付き合うことと大きなお金をいただくことはまったく別ごとなのだろう。ならば、なぜ紫垣ならば「一も二もなく承諾」させることができたのだろうか。紫垣によれば事業一筋で「政党と骨董が一番嫌ひであると口癖のように云ってゐた」古庄も事業の成功が一段落すると、やがて名誉心がおこり「貴族院議員」を熱望するようになったそうである。熊本で政友会と民政党の貴族院議員をめぐる熾烈な政争の中で、紫垣の強力な調停によって、古庄が貴族院議員に選出された。古庄と紫垣は林市蔵を介して相知り、当初相性も悪く互いに反目していたようだが、熊本電気（後に九電に統合、吸収）の難しい人事を紫垣が収めて、互いに認め合う関係になったようである。阿倍野達が「私に特殊な先輩、知己があることを知悉してゐたらしく話の節々でそれとなく察せられた。」というのはこういう関係を指すのであろう。

古庄財閥の盛衰は『古庄財閥』に詳しいが、戦後、「古庄財閥」は様々な理由で事業を縮小された。それでも、熊本では中堅繊維商社を営む名門、名家として広く知られている。現在の「古庄本店」の代表取締役社長、古庄善啓氏は長く学校法人熊本学園の評議員である。70周年記念募金にもいち早く応じてもらった。学長在職中、私は挨拶する機会があったが、大学との長く、深い関係はまったく知らなかった。後に述べる、東洋語学専門学校の設立にも古庄健次郎は多額の寄附をしている。熊本学園大学（熊本商科大学）の「産業経営研究所」にも「古庄本店」は長年支援を続けている。お金というものは、支援した方はいつまでもそのいきさつを大事にするものだが、受けた方は忘れがちなものだ。この拙文が現在の熊本学園大学関係者に「忘れるべからざること」として記憶されんことを期待したい。阿倍野とともに紫垣の下に赴いた緒方南溟（1867～1940）についてもエピソードを記しておきたい。

緒方南溟も先に述べた、紫垣の祖父の弟の友枝庄蔵の「友枝塾」、「済々黌」に学んでいる。佐々友房の指示で中国において様々な活動に従事し中国語が堪能であった。明治44年10月の失敗した第一次中国革命「武昌蜂起」の後、亡命先のアメリカから帰国した孫文と香港から上海までの船中を宮崎滔天ともども同行している。中国語が堪能な緒方が滔天の通訳をした。この時の孫文との会見記を九州日日新聞（熊日の前身）にスクープ記事として送っている。この会見の中で、日本による朝鮮の保護国化をどう思うかと問われ、ロシアの脅威が迫っている現状では容認できると孫文が述べ、このことが後々批判されることになる。「東洋語学専門学校」

の先蹤、海外協会の支邦語学校、したがって熊本学園大学の「種を蒔いた人々」がいたことも「忘れえぬ事柄」である。

いよいよ、東洋語学専門学校の創立にかかわる経緯である。この経緯も「正史」にはないことがらであるので要約することなく紫垣の言うところを長文の引用になるが『大凡荘 夜話』によってそのまま紹介しよう（旧仮名遣い、旧漢字、当て字はそのママー引用者）。

支邦語学校建設が動機となって遂には東洋語学専門学校に昇格せしめたいとの意欲が阿倍野に湧いて、また私の処に相談に來た。今度は金額の桁が違う。二桁も三桁も違う。熊本では出来る筈がない。しかし乗込んだ船である。私は断り切れない。当時熊延鉄道の社長であった田副清に相談して見た。田副は私より、三、四年後輩であったが。若くして県会議員となり熊本の政界に重きをなしていた。彼が熊本造船所の専務となったことは前に書いたが、田副は特殊の存在で本気者であった。また知識人もあった。当時陸軍省軍務局長であった武藤章は田副の無二の親友であり、弟の登は武藤より一期下の軍人で最後に中將まで昇進した逸材であったが病死した。田副は武藤章に相談してはと持出した。しかし其の頃満州事変は北支中支に波及し太平洋の波も漸く高まらんとする時、武藤を軍務以外に煩わすことには気が向かなかつたけれども、阿倍野の熱意を無視するに忍び得なかった。阿倍野に田副の意向即ち武藤章を煩わしてはどうかとす々めてみた。阿倍野は田副の先輩でもあり、武藤章とは陸軍大將武藤信義によって繋がれ特殊の関係にあった。（断って置くが、武藤章と武藤信義とは同姓であったが血縁関係はない。）

阿倍野は武藤をどうして動かしたか知る由もないが、武藤は尽力することを誓った。先ず十万円が必要である。その頃私は東京、熊本を半々位に往復してゐた。私の定宿は神田錦町東岳館と云う二流に少し輪をかけた位の旅館であった。その頃の宿料は一泊二食付きで二円五十銭前後であったと思ふが、私は特別にその倍額の部屋を占領してゐた。

或る時、番頭が私の部屋に慌て々駆け込んで來た。当時飛ぶ鳥を落す勢いであった軍務局長の武藤章が突如として來訪したからであった。武藤は単刀直入、阿倍野の東洋語専の件を持出し、当時令名を博してゐた山下亀三郎に相談してみたいから同伴してくれと、態々自動車で迎えに來たのであった。武藤は山下が武藤以上に私と別懇であると解釈してゐたからであろうが、武藤ほどの切れ鎌でも金策には余程の苦手で私に援軍を頼みに來たのである。山下と私の特殊の関係は後で述べるつもりであるが、とにかく阿倍野の懇願であり、軍務局長の御出迎へである。同伴せざるを得なかった。山下は何等ためらうことなく十万円の寄付を快諾した。東洋語学専門学校の基礎を造ってくれた武藤章の労苦と山下亀三郎の俠心を、今日の商科大学の

関係者は知ってゐるであろうか。(437～8頁)

武藤章は熊本出身のエリート軍人であるから郷土の学校設立に尽力したとしても不思議はないが、山下亀三郎は愛媛県の人である。彼が「山下は何等ためらうことなく十萬円の寄付を快諾した。」とあるように、今（昭和30年代後半）の貨幣価値で言えば、1億円を超える寄付をなぜ快諾したかはこの言述だけではよくわからない。少し推察をたくましくしよう。

山下亀三郎（1867～1944）は山下汽船の創業者であるが、戦争を好機として事業を拡大し、太平洋戦争開戦時には、明治以降の日本の2大商船会社、日本郵船と大阪商船に迫る会社となっていた。彼は広く政財界に食い込み、軍部の要人とも交際し、1943年には東條内閣によって創設された内閣顧問に任命され、大正昭和期の典型的な政商であった。彼は海運業によって財をなしただけでなく、郷里を始め各地に学校を設立するなど社会事業にも力を尽くした。とは言え、縁もゆかりもない熊本の地方私立大のためになぜ巨額の金をという疑問は依然として残る。私の推測ではやはり、山下亀三郎は安達謙蔵と格別な関係があったと思われる。安達は大正14年通信大臣に就任した。彼は在職中、放送事業の統一、外港船舶の発展など日本の近代化、産業振興にも功績があった。山下は民政党の有力政治家であった安達に深く取り入ったのではないかと推察される。山下にとって武藤、紫垣がいかに強力な依頼者であるとしてもやはり、これほどの高額な寄付を快諾したかについては背後に安達が存在があったからであろう。

安達は自宅のあった熊本市島崎に昭和11年、精神修養の場として肥後の三賢人、菊池武時、加藤清正、細川重賢の座像を安置する「三賢堂」を建てた。これに先立って、横浜市には八人の聖人を祀るより壮大な「八聖殿」を昭和6年に建立している。現在は横浜市の「郷土資料館」として保存されている。横浜の有名な「山下公園」は山下亀三郎の寄進によるものでその名前を冠している。「八聖殿」は横浜港を見下ろす「本牧公園」にほど近い小高い高台にある。谷を隔てて有名な「三溪園」がある。この風光明媚な景勝地に「八聖殿」を築きえたのは、通信大臣就任前とは言え、山下などの有力な財界人の支援があったのだろう。安達は東洋語学専門学校の「設立準備委員長」としての役割を十二分に果たしたのでないと思われる。話はこれで終わらない。紫垣はさらに興味深い経緯を話す。

山下亀三郎が快諾して寄附してくれた十萬円は、今日（昭和30年代後半—著者）の貨幣価値から云えば一億円近くに相当すると思ふ。しかし之でも尚足りぬ。お次の番は熊本電気会社であった。阿倍野は、当時の会長林市蔵とは無二の親友であり、社長の中島為喜とも副社長の

坂内義雄とも懇意であったが、いざ金の問題となると別である。親交の厚薄のみでは金は出来ない。理屈や道理では解決しない。何か特殊な因縁とか情実関係とかも必要ではないだろうか。否それのみでも困難である。説得するには熱意が要る。威力が要る。力量が要る。

・・・後藤新平に同伴して、日比谷公会堂建設費用三百万円の寄附を獲ち得たことを阿倍野は私の手腕が預かってゐると誤信し、また最初の十万円も私の手腕力量と過信して、林に懇願してくれと指名された。しかし私は先輩の阿倍野に熱意力量が勝つてゐるなど毛頭思わなかったし、また阿倍野に頼まれて左程せねばならぬ親交関係もなければ、学校建設に対しても実際の処何等熱意も関心なかったけれども、どうした風の吹廻しか、即刻受諾した。金額は十五万円でもある。

私は林市蔵の来熊を待って中島、坂内の三者に集まって貰ひ十五万円の寄附を申出た。三者とも顔を見合わせて当分無言であった。や々あって林から阿倍野は何故に自身出向かず、貴下を煩わしたであろうかと言って不愉快そうな面持ちであった。中島、坂内は一言も発しなかったが、林同様不愉快な態度を示した。しかし私は彼等三名以上嫌な気持であったけれども、阿倍野に引受けたと受諾した以上彼等の不満を見て引下ることは私の性格が許さない。私は執拗に迫った。何と言って迫ったか今は覚えてゐないが、兎に角熱誠こめて説いた。三者のうちでは一番年下の坂内が、他人のことを心配するのも悪いことではないが、それよりも貴下自身のことを今少し考えてはどうか、と熱意ある忠告をした。所は熊本市花岡山にあった蓬萊閣の一室であった。その年の十月頃、秋の日ごしは短く午後三時頃の会合が六時近くまで殆ど三時間を費した。電灯がついた。夕食の用意も整つてゐたが、女将も仲居も余程重大なる密談と察してか、時偶茶を入れ替えに来るのみで遠慮して近づかない。こままで来ればすでに強談の他はないと思った。しかし、私に強要する何一つの理由もなく、また権利も資格もない。只懇願あるのみ、隠忍あるのみである。私は・・・野田大塊、犬養木堂、後藤新平の面の皮のことを思い浮かべた。押しである。粘りである。つまり面の皮である。しかしその押しも粘りも正直から出た誠の叫びであらねばならぬことに腹を決めた。

上田兎変に際して尽くした私の誠意と粘りにより電気会社を危ふきに至らしめなかったと自称するのもどうかと思ふが、彼等は其の功績を感謝してゐる。その時私が会社に何等の要求をしなかったことも知つてゐる。有体に云えば三者共私自身に対しては何等かの報酬をせねばならぬことを屢々口にしてゐたが、その時までは私の方から只の一度も無理は言つて居らぬ。私の得手勝手な考えではあるが、若し私がゐなかつたとすれば、会社はどうなつてゐたか。その事に対しても十五万円位の報酬は当然して良いではないか。浅間しい考えであつたかも知れないがさうも思った。しかし阿倍野の東洋語専とは全然別である。三者とも其の事に思ひを馳せ

たと見えて、私個人に何とかせねば相済まぬと金高は口にしなかったが林市蔵が口を切った。中島、坂内の両者も異口同音これには賛成した。しかしそれでは阿倍野に対して済まぬとか済むとか云う考えは別として、私の性格が間違っているかも知れないが、飽くまで学校の寄附一本で迫った。癩癩は禁物である。

すでに七時を過ぎた。坂内は暫く待ってくれと私に言って、林、中島の両者を招き、ほんの五分間ばかり別室で協議して、打って変わった御機嫌で三者が誰言ふとなく「負けた。まけた」と言って這入って来た。十五万円は多過ぎる。せいぜい十万円位と思ったが、どうせ出すならと要求通り、十五万円出すことを承知した。私は自然と涙が湧いて感激の頭を下げた。

阿倍野が感謝感激したのは勿論である。一度機運が向く時は重なるもので、この話を知った古庄健次郎が五万円の寄附を申出た。その他有志から相当の寄附もあったと聞いたが、それは誰が幾ら出したか私は全然関知してゐない。かくて東洋語学専門学校が設立され、今日の熊本商科大学になった次第である。

阿倍野は謝礼として英国製の最上の毛布を持参した。その後私は海外協会からも学校からも機会ある毎に鄭重な挨拶を受けていたが、現今海外協会の理事長である石坂繁はこれを知るや知らずや。私は欧米には一度も足を踏んだことはないが、東洋各地には私ほど関係が深いものは熊本には現在居らぬと同時に相当熊本のためにもなったと思ふが、これは私の一人よがりの自惚れであろうか。或いはまた私の不徳の致すためであろうか。敢えて石坂繁の心境を問ひたい。商科大学の現学長鰐淵健之は多少知ってゐる模様で一度感謝の意を表したことがあり、前学長の高橋守雄は誰に聞いたか、就任間もない頃、松の石付盆栽を自身謝礼のため持参したことがある。女々しいことを云うのではない。勿論恩に着せようなどの心も毛頭ない。只大義礼讓を弁えざる現在の所謂紳士、文化人と称する亡者共を戒むるため憎まれ口を附記して置く。(438～440頁)

実に興味深い人間ドラマである。この長広舌の、実に人情の機微をついた、天才的交渉術にたけた自慢話を十分味読するには若干の解説が必要であろう。

熊本電気は再三述べたように、後に九電に統合、吸収される熊本の電力会社であった。上田萬平は天草で有名な資産家の出自で優秀な官僚であったが、郷土の熱心な懇望で帰郷し、熊本電気の社長を務めていた。ところが彼が暴漢の兇刃に倒れるというアクシデントがあった。この後継をめぐるまた大紛擾が起こった中で、紫垣は大いにフィクサー振りを発揮し、林市蔵、中島為喜、坂内義雄の体制で事を収めたのである。彼等三人は確かに大きな借りが紫垣にできていたのである。

とは言え、百五十万円（今日で言えば1億数千万円）という金額はさすがに「一も二もなく」快諾できるような金額ではなかったので上述のような息を呑むやり取りが生じたのである。「いざ金の問題となると別である。親交の厚薄のみでは金は出来ない。理屈や道理では解決しない。何か特殊な因縁とか情実関係とかも必要ではないだらうか。否それのみでも困難である。説得するには熱意が要る。威力が要る。力量が要る。」「こつまで来ればすでに強談の他はないと思った。しかし、私に強要する何一つの理由もなく、また権利も資格もない。只懇願あるのみ、隠忍あるのみである。私は・・・野田大塊、犬養木堂、後藤新平の面の皮のことを思い浮かべた。押しである。粘りである。つまり面の皮である。しかしその押しも粘りも正直から出た誠の叫びであらねばならぬことに腹を決めた。」

このような交渉は天才的フィクサー、紫垣によってのみよくなしえたことであろう。「私は欧米には一度も足を踏んだことはないが、東洋各地には私ほど関係が深いものは熊本には現在居らぬと同時に相当熊本のためにもなったと思ふが、これは私の一人よがりの自惚れであろうか。或いはまた私の不徳の致すためであろうか。敢えて石坂繁の心境を問ひたい。・・・女々しいことを云うのではない。勿論恩に着せようなどの心も毛頭ない。只大義礼讓を弁えざる現在の所謂紳士、文化人と称する亡者共を戒むるため憎まれ口を附記して置く。」この石坂に対する恨み節はなんだろう。わざわざ「私は欧米には一度も足を踏んだことはないが、東洋各地には私ほど関係が深いものは熊本には現在居らぬと同時に相当熊本のためにもなったと思ふが、これは私の一人よがりの自惚れであろうか。或いはまた私の不徳の致すためであろうか。敢えて石坂繁の心境を問ひたい。」とあるこの独白は、この顛末から後々、戦後に執筆されていることを念頭におかなければならない。石坂は五高、東大で学んでいるが、特に英語、ドイツ語が堪能であった。欧米の有力新聞を市長時代も原語で読んでいたこともよく知られていた。また熊本市長時代にヨーロッパを視察し、ハイデルベルグでの歓迎会ではドイツ語でスピーチしたことも熊本ではよく知られていた。石坂は政治家と言うより学者的だと評価されるようなインテリ、文化人であった。「現在の所謂紳士、文化人と称する亡者共を戒むるため憎まれ口を附記して置く。」という、この紫垣の言い草は実に無邪気で、戦後、アジア主義者は省みられず、欧米通が尊ばれるようになったことへの憤懣であろう。紫垣の自ら言う負けず嫌いの性格を印象付けて面白い。ここで、せっかくの機会であるから付言しておきたいことがある。石坂は剣道の有段者で特にその立ち姿は立派であったと立ち会った人から聞いた。単なる文化人ではなかったのである。彼の一人息子、健郎は済々黌、陸軍士官学校と進み、終戦間際、昭和19年11月、フィリピン沖の米軍との空中戦で覚悟の戦死をしている。彼も済々黌時代から、文武両道に秀で、後輩達の憧憬の的であったそうである。

武藤章は山下亀三郎からの寄付に貢献しただけでなく、「正史」に記されているように、陸軍の外郭機関である興亜院からも百万円の資金を斡旋している。東洋語学専門学校の創設資金の調達に関しては尽力を惜しまなかった。もちろん、彼が単に熊本出身であったからだけではなく、中国語、ロシア語、マレー語の専門家養成が喫緊の課題であり国策に合致するものであることを認識していたからであろう。私は東洋語学専門学校設立に武藤章陸軍軍務局長が関係していた事実を始めて知ったので、武藤章については関連文献、資料を読み、遺族からの聞き取りも行った。現在の熊本県菊陽町が生家であるが、父親、長兄はその地の資産家、名望家であり、姉は細川藩の時代にさかのぼる医者の家系に嫁いでいる。彼は母親の一人ぐらいいはお国のために軍人にといい願いで済々黌、陸軍幼年学校、陸軍士官学校、陸軍大学に進んだエリート軍人であった。若い時には様々な煩悶もあり、文学やマルクス文献にも親しんだ教養ある軍人であった。

武藤は残念ながら、東京裁判で絞首刑に処された7名のうちの一人である。絞首刑に処された軍人はみな60歳代で、大将であったが、彼だけが50歳代、中將であった。東條英樹が君までこういうことになってと詫びたようである。東京裁判については近年、昭和史の研究家の間で新たな視点、材料に基づいて再検討がなされている。後日、武藤章、東京裁判については是非あらためて書き留めたいことがある。

また、「私は・・・野田大塊、犬養木堂、後藤新平の面の皮のことを思い浮かべた。」とあるように、紫垣はいよいよの土壇場で「面の皮」を思い浮べるほどに犬養木堂、後藤新平とも親しい関係にあった。後藤新平は岩手県出身ではあるが熊本とも深い関係がある。この関係についても他日を期したい。

もちろん、紫垣隆の「自叙伝」ともいうべき、浩瀚な『大凡荘 夜話』が公刊された時期（遅くとも昭和38年）には、この著書に登場する多くの現存者、その近親者がいたことになる。紫垣の「月旦評」には不満、異論もあったようであるが、事実関係については多少の記憶違いはあってもおおむね真実であろう。荒木精之『熊本県人物誌』（昭和34年）が有力な傍証となろう。

阿倍野利恭の功績のうちで最も大きいものは、海外協会の維持と、熊本商大の前身東洋語学専門学校の創設であろうか。・・・この時（「支邦語学校」―引用者）の資金は阿倍野が友人紫垣隆を通じて古庄健次郎からの五千円の寄付ではじめたものである。校長には彼は緒方を推したが、謙讓な緒方は「貴公なるがええ」と彼にゆずった。その後更に東洋語学専門学校に昇格させることになり、彼はそのために日夜肝胆をくだしている。その資金十万円がどうしても

出来ず、当時陸軍で羽振りをきかしていた熊本出身の武藤章を動かし、武藤と前記紫垣隆とが行って山下汽船の山下亀三郎から十万円もらうことに成功した。その後また熊本電気から紫垣の肝入りと林市蔵、桜内義雄らの厚意で十五万円の寄付をうけ、それがもとで黒髪町に学校をつくることが出来た。(211 頁)

最後にもういちど紫垣隆という人物とその歴史的背景を理解しておきたい。頭山満、宮崎民蔵・滔天兄弟は「国土」、アジア主義者としてつとに有名である。紫垣もこの系譜に属する典型的な人物であった。中国、朝鮮、満州、モンゴルには数多くのナショナリスト派閥が族生し、親日、反日、抗日などの様々なグループが入り乱れていた。政府は中国に対しては清朝滅亡までは清朝を正式な外交上の相手としなければならない。孫文のような清朝打倒を目指すナショナリストを直接支援するということは政府には公式的にはできないことであった。したがって、何らの公的な肩書きのない、国土、「大陸浪人」こそが活躍、暗躍できる国際情勢があった。彼等の多くは地方の資産家の出身者が多く、かつまた魅力的な人物が多かった。時には、政府の暗黙の承認の下で、時には、政府に抗してまでも、大陸のナショナリスト達を支援した。孫文は亡命中に阿蘇の栃木温泉に1ヶ月滞在したこともあり、済々黷で講演したこともあり、荒尾の宮崎家を訪問している。彼等国土と孫文は同志的關係にあったのである。しかし、満州事変以降、軍部が全面に出るようになると彼等の活躍の余地はなくなってきた。彼等の中には失意のうちに晩年を送った者も少なくない。

東洋語学専門学校の設立の背景には、裏面には紫垣隆をはじめ多くの人物が織り成すドラマ

があった。東洋語学専門学校の基礎を造ってくれた先人の労苦と義侠心を今日の熊本学園大学の関係者は知ってゐるであろうか、と紫垣ならずとも思った。

参考文献

- 『熊本短期大学・商科大学 40 年史』昭和 58 年
『近代熊本の巨人』徳永洋、平成 24 年
『大凡荘 夜話』紫垣隆、昭和 38 年
『保田與重郎のくらし—京都・身余堂の四季』、新学社、平成 19 年
『喜寿 紫垣隆翁』昭和 36 年
『林市蔵 民生委員の父』平瀬努、潮書房光人社、平成 26 年
『熊本県人物誌』荒木精之、日本談義社、昭和 34 年
『言葉のゆりかご』井上智重、熊日出版、平成 27 年
『城下の人』石光真清、石光真人編、中公文庫、昭和 53 年